

(4) 道徳性・規範意識の芽生え

友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。



一緒にやろうね

うさぎと触れ合っていると、うさぎに愛着がわいてくる。次第に子どもたちは「お世話をしたい。」という気持ちになった。しかし中にはうさぎが苦手な子もいる。友達と保育者と一緒に話をする。「何だったらできそう?」「うーん、お水はできる。」「じゃ、お水やってね。」と、友達同士折り合いを付け、世話をしている。ゲージの取り付けに一苦労。「みんな持って。」と声をかけると、周りにいた子が持ち、取り付けることができた。

保育者の援助と環境構成

子どもたちは、小動物をじっと見たりえさをあげたり等、触れ合いながら、命あるものへの温かな感情が芽生えます。自分たちでできることをしようと無理のない範囲でお世話が始まるのです。中には動物に対する抵抗感をもつ子もありますが、子ども同士、何ができて何が難しいのかを伝え合い、今できることに対し力を合わせられるように、話を聞きながら援助しています。うんちを見て「いいうんちだね。」と伝えにきてくれたときは、「よかった。よく見てくれているね。ありがとう!」と伝えています。



もうやらない...

深まりゆく秋、ボールに慣れ親しんできた子どもたちはが、チームに分かれてドッジボールをしている。外野に出てなかなかボールが捕れずに「もうやめた!」と場から離れていった子は、木の下にしゃがみこんだ。友達から「抜けないでよ。」と言われても返事はない。保育者に声をかけてもらい、しばらくすると戻ってきた。ボールを投げる友達の動きをよく見るようになっていた。「こっちー!」と大きな声を出す姿もあった。

保育者の援助と環境構成

いつでも遊び始められるようにラインを描く（水の場合もあり）ようにしている集団遊びは、いろいろなことが起こります。チームの人数が違って始めてしまう、ボールを強く投げる子のチームに集まりたがる。ボールが捕れない、先に捕った、捕らないでお互いに譲らずの場合もあります。このような状況になったときに、みんなが楽しくできるためにどうしたらいいのかを、一緒に考える時間を作り、自分たちで解決する方法を考えられるように援助しています。

できることをする



うさぎの世話をしている最中に予期せぬことが起こりました。ケースを開けたはずみで、えさが散らばってしまいました。「しまった・・・」と神妙な表情です。そこに気付いた子が、「拾わなくちゃね。」と言って自分からえさを集め始めました。

友達の困った思いに気付き、行動するすてきな姿が見られました。

